カミュ研究の現況

松　本　陽　正

昨年9月1日より今年の6月29日まで，約10ヶ月間，文部科学省の在外研究員としてフランスに行かせていただきました。この間教室の運営等々，原野先生にはご迷惑のかけっぱなしでしたし，授業や論文指導にも大きな穴をあけ，学生さんたちにも申し訳ないことをしてしまいましたが，僕にとっては生涯忘れえぬ日々となりました。多くのことを見聞し，さまざまな経験を積むことができましたが，別に遊んでばかりいたわけではなく，少しは勉強もしてきたということを今日は少しお話ししたく思っています。

僕を受け入れてくれた先生はマルヌ=ラ=ヴァレ大学のジャニーヴ・ゲランという方で，文学と政治とのかかわりを中心に研究をすすめられていて，カミュについての著書もあります。ゲラン氏を中心とした研究会«Littérature et savoir des formes»のセミナーに欠かさず出席し，彼が主宰した現代作家ジョルジュ・サンプランについてのコロックなどにも参加しましたが，今日は「カミュ研究の現況」と題し，カミュに焦点を絞ってご報告させていただきます。

実は，帰国後，原野先生から「カミュ研究の現況」といったようなことで何か話してみないかと言われました。一日考えた末，結局先生から示されたタイトルを変更することなく，そのまま使わせていただくこととしました。「カミュ研究の現況」という題目はもちろんフランスにおけるカミュ研究の現在の状況を指すのでしょうが，それでもどこでのカミュ研究なのか，誰のカミュ研究なのか，あいまいといえばあいまいです。したがいまして，あいまいさを逆手にとって，このタイトルなら僕のカミュに関する研究の現況といったようなこともあわせてお話しできると思ったからです。

カミュに関することで，僕が参加したり，調査したり，あるいは発表したりしたことを整理してみますと，（1）セルジー=ポントワーズ大学での3日間にわたるコロックへの参加　（2）カミュに関する博士論文の

soutenance への出席　（3）カミュ研究会総会への出席　（4）カミュ研究者との意見交換　（5）資料調査　（6）カミュの足跡探訪　（7）研究論文発表，といったところでしょうか。

そのようなことをお話しする前に，カミュ研究会について簡単にご説明しておきます。カミュ研究会は発足して今年で 20 年目になります。30 ヶ国の研究者が会員になっていまして，アメリカ支部と日本支部を別にした現在の会員数は，賛助会員も含め 274 名です。主な内訳は，フランスがもちろん圧倒的で 196 名，ついでイギリス 12 名，ドイツとイタリアが 10 名となっています。フランスを別にすれば会員数が抜きんじて多い日本とアメリカは，「支部」扱いです。両支部の会員数は拮抗していたのですが，アメリカ支部長のレイモン・ゲイ=クロジエ氏がインターネットで呼びかけたことが功を奏し，アメリカ支部の会員数は飛躍的にのび，現在は約 70 名，日本の 34 名に大きく水をあけています。

日本のカミュ専門家と欧米のそれとでは，大きな違いが二つばかりあるようです。日本のカミュジアンはほぼ全員が大学教師か学生なのですが，欧米のカミュジアンには，弁護士や技師といった大学人ではない方もかなりいます。文学が生活のなかにふかく根をおろしている感じです。また，フランス人にとってフランス文学は言ってみれば「国文」ですから当然のことかもしれませんが，全般的にカミュプロパーな方は少なく，研究対象が一作家に限定されていない印象を受けました。先に述べました，ジョルジュ・サンプランのコロックではゲラン先生やカミュ研究会会長のジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史の研究発表がありましたし，『異邦人』や『転落』について優れた著書のあるピエール=ルイ・レイ氏はプルースティアンとしても有名ですが，現在の研究対象はデュマとのことでした。

カミュ研究会では年に 4 回，「会報」«Bulletin d'information»が発行されていて，新刊のカミュ研究書の紹介はもちろん，カミュに言及のあった書物，雑誌，新聞，テレビやラジオ番組の紹介，コロックや soutenance の予定や報告等々，さまざまな情報が紹介されています。情報については，«Web Camus»からも流されていますが，最近は，宿題を片付けるためにリセアンがごく初歩的な質問を寄せるようになり，総会でも問題になりました。総会終了後，«Web Camus»開設者のジョルジュ・ベニクール氏から，『広島大学フランス文学研究』に掲載していた論文のレジュメを

«Web Camus»で公開する許可を求められました。日本語で書いたものであってもフランス語のレジュメを添える意味を再認識させられました。本研究会の研究会誌では 1993 年の第 12 号より和文の掲載論文にはフランス語のレジュメを付すようになりましたが，そのようになっていてよかったと思っています。

コロックも最低年に1回は開かれていますし，その他にもさまざまな活動が展開されています。僕が渡仏していた間だけでも，後で触れますセルジー=ポントワーズ大学でのコロック以外にも，2001 年が『反抗的人間』刊行 50 周年にあたっていましたので，10 月 27 日にはエクス=アン=プロヴァンスで『反抗的人間』をめぐる二つの講演がありましたし，エックスにある「アルベール・カミュ資料センター」«Centre de documentation Albert Camus»では 10 月 18 日から 12 月 21 日まで『反抗的人間』についての資料展示会が催されました。(僕が「アルベール・カミュ資料センター」に行った 2002 年 6 月には『戒厳令』についての資料展示会が開かれていました。) またアメリカのアトランタでも 11 月 10 日『反抗的人間』をめぐるコロックがありました。翌 2002 年 1 月 23 日と 24 日には，リヨン近くのドミニコ会修道院でフランソワ・シャヴァンヌ氏が 5 つの講演を行っています。

フランスでのコロックは，昨年 11 月 22 日より 3 日間，セルジー=ポントワーズ大学で開催されました。テーマは«Albert Camus et les écritures du XXe siècle»というもので，28 の発表がありましたが，このコロックを特徴づけるものは「カミュとアルジェリアのエッセイストたち」「アルベール・カミュからロラン・バルトへ」といった類いの発表が多かった点です。一昔前には「ドストエフスキーとカミュ」だとか「ジッドとカミュ」といった，カミュが影響を受けたと想定される作家とカミュとの比較がなされていましたが，このコロックではカミュの現代文学，現代思想への影響が大きくクローズアップされていました。カミュもついに古典的な作家の仲間入りを果した，そんな思いを強くしました。肝心の研究発表はやや表層的な類似の指摘にとどまるものが多く，その点では落胆を禁じえませんでしたが，ともかくこの 3 日間のコロックをとおして痛切に感じたことはフランス語で発信することの必要性，ということでした。

僕が渡仏している間にカミュに関する博士論文の soutenance が二つありました。フランスでのカミュ研究は盛んです。soutenance 終了後のパーティ

は多くのカミュジアンと知り合い，意見交換するまたとない機会となりました。研究仲間の東浦弘樹氏の soutenance の折には，jury だったカミュ研究会会長のジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史やジャン・サロッキ氏，アンドレ・アブー氏といった著名なカミュ研究者の知己を得ることができました。カミュ関係のものではないのですが，マルヌ=ラ=ヴァレ大学の若き研究者の「N.R.F.」に関する博士論文の soutenance にも出ましたが，その時には終了後のパーティの席で jury の一人だったピエール=ルイ・レイ氏と歓談することもできました。

カミュ研究会総会は 2002 年 5 月 18 日にポンピドゥー・センターで開かれました。総会終了後，カフェでの懇親会ではカミュ研究会の副会長でアメリカ支部長のレイモン・ゲイ=クロジエ氏とたまたま隣り合わせました。ゲイ=クロジエ氏はエクス=アン=プロヴァンスにある「アルベール・カミュ資料センター」で資料調査してきたばかりでしたから，調査方法についてもいろいろ質問することができました。ゲイ=クロジエ氏はまたカミュの新プレイヤッド版の編集責任者の一人なのですが，日本学術振興会の研究員として同じ時期に渡仏していたカミュ研究会日本支部長の三野博司氏に誘われ，総会の翌々日ゲイ=クロジエ氏と夕食を共にし，新プレイヤッド版について情報を入手することもできました。目下進行中の企画ですから，事前に公にできぬ点もあり，詳細な情報というわけにはいきませんでしたが，以下，概要のみご紹介します。

現在のカミュのプレイヤッド版は，1998 年に自殺したロジェ・キーヨが一人で編集にあたりましたが，新プレイヤッド版の編集責任者はジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史とレイモン・ゲイ=クロジエ氏で，総勢 15 名の研究者が執筆にあたるそうです。

現在のプレイヤッド版は全二巻で，第一巻が *Théâtre, Récits, Nouvelles*(1962)，第二巻は *Essais*(1965)といったように，ジャンル別分類です。ちなみにページ数は第一巻が 2082 ページ，第二巻が 1975 ページで，第一巻は 1684 ページまでがテクスト，第二巻は 1166 ページまでがテクストとなっています。それに対して，新プレイヤッド版は全四巻，2004 年に最初の二巻，2006 年に残る二巻が刊行される予定です。大きな特色は，ジャンル別分類ではなく，chronologiquement に分類される点です。第一巻には 1942 年まで，第二巻には 1948 年までの著作が収められるとのことです。したがいまして，カミュの『手帖』*Carnets* は全巻に分散し

て収められることになり，三人で会食の折にも話題になりましたが，*Carnets* に関しては新プレイヤッド版刊行後も今でている全三巻の単行本の方が使い勝手がいいということになりそうです。

また，新プレイヤッド版各巻は 1500 ページ以内，内テクスト 1000 ページ，「解説」「注」「ヴァリアント」等が 500 ページの割合になるとのことです。これはカミュの新プレイヤッド版だけに関することではなくて，プレイヤッド版を研究者用としてではなく，ひろく一般の読者にも親しめるものにしようとのガリマール社の方針だとのことです。

新プレイヤッド版には correspondance はのらないものの，すべての未刊のマニュスクリが収録されます。もっとも，紙数の関係からすべてのヴァリアントとはいかないようで，ヴァリアントについては主要なものに限定されるようです。すべての未刊のマニュスクリがのるわけですから，決定稿とは大幅に異なっている『ペスト』のマニュスクリの全貌が明らかになりますし，それに処女作品『裏と表』以前に着想されていた小説の草稿断片である『ルイ・ランジャール』"*Louis Raingeard* "などがついに公にされることになります。

『ルイ・ランジャール』について少し補足しておきましょう。ジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史は，『裏と表』以前，1933 年かもしくは 34 年にカミュが着想していた，「ルイ」という名前が出てくる小説の草稿断片を『ルイ・ランガール』"*Louis Raingard* "と命名し（引用符つきにされているのは，カミュ自身がつけたタイトルではないからです），その浩瀚な博士論文(*Genèse de l'œuvre romanesque d'Albert Camus*, thèse d'État soutenue à Paris IV en 1980)の中で詳しく紹介しています。着想されていたこの小説は，自伝的三人称小説という点で，カミュの遺稿 *Le Premier Homme* を理解するうえでもきわめて重要なものです。

『ルイ・ランジャール』に触れたついでにカミュの écriture について少しお話ししたいと思います。論文の中で，ジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史は，プレイヤッド版の「注」でロジェ・キーヨが「『肯定と否定のあいだ』のための草稿断片」として紹介しているくだりをとりあげ，キーヨは«Louis»を«Lui»と読み違えていると指摘し，この部分は「『肯定と否定のあいだ』のための草稿断片」ではなく『ルイ・ランガール』"*Louis Raingard* "の草稿断片であるとしています(*Ibid.*, p.336)。5 月 18 日の総会の後，ゲイ=クロジエ氏と話していた折，正しくは『ルイ・ランジャール』

"*Louis Raingeard* "だと教わりました。最近になって«e»があるのがわかったようです。もっとも，ジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史自身，「ランジャール」"Raingeard"となっている箇所も時折あると博士論文の中で断っていたことも言い添えておかねばなりません(*Ibid.*, p.341.)。別に揚げ足をとるつもりは毛頭ありませんが，プレイヤッド版の編者ですらこんなふうに解読間違いをするカミュの écriture ですから，僕なんかが見ても判読などできるはずはありませんし，もう少し待てば新プレイヤッド版でマニュスクリが見られるのですが，せっかくの機会と思い，カミュの資料調査もしてきました。

カミュに関する資料はほとんどが I.M.E.C. (Institut Mémoires de l'Edition Contemporaine)にあったのですが，2000 年にエクス=アン=プロヴァンスに移されました。「ほとんど」というのは，『異邦人』のマニュスクリについては，プレイヤッド版を編むにあたってロジェ・キーヨは二つ参照したとしていますが，エックスには一つしかありませんし，三野氏から得た情報では『ペスト』のマニュスクリは旧 B.N.にあるようです。ちなみに，諸作品のオリジナル原稿は銀行(B.N.P.)の金庫に保管されています。

«Bulletin»によれば，I.M.E.C.にある inventaire をみて，資料閲覧の許可をエックスの「アルベール・カミュ資料センター」に願い出，カミュの遺族の autorisation を得て初めて資料調査が可能になるとのことでしたが，これにはなかなか苦労しました。まず，I.M.E.C.に行ったのですが，カミュ関係のものはすべてエックスに移され，inventaire もないと言われてしまいました。総会の後，ジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史にその話をしますと，そんなことはない，とおっしゃいますので，再度 I.M.E.C.に足を運び，やっと inventaire を目にすることができました。レイモン・ゲイ=クロジエ氏より教わったコード番号も忘れず記入し，エックスの「アルベール・カミュ資料センター」に送ったのですが，なかなか返事がきません。しびれをきらせ，電話をしても，プープーという音が聞こえるばかりでまったく通じません。«Bulletin»で紹介されていた電話番号が変っていたのです。マルヌ=ラ=ヴァレ大学の事務の方にインターネットで調べてもらってもうまくいかず，I.M.E.C.に問い合わせてみても回答は得られず，12 番に聞いてもわかりません。最後の手段として，«Bulletin»担当のピエール・ル ボー氏へのメールでの照会を三野氏に頼んでみますと，三野氏が機転をきかせ，エックスの standardiste に問い合わせてくれ，やっ

と電話することができました。電話にでた司書のマルセル・マアゼラさんによれば，返事の手紙は一週間ばかり前に送ったとのことです。なにかの手違いで届かなかったようです。(後日，手紙が届きましたが，郵便番号が間違っていました。ために，遅配になったのでしょう。) 電話ではまた，申請書類に不備があるとの指摘を受けました。「アルベール・カミュ資料センター」にある申請用紙«Demande de consultation»に理由も明記し，申し込まないといけないとのことです。そんなものなぜ inventaire を置いてある I.M.E.C.にないのだ，と少し腹も立ちましたが，すぐにファックスで申請用紙を送ってもらい，翌日に返事をファックスで送付，数日後にやっと autorisation を得ることができました。

エックスでは3日間，資料調査しましたが，マアゼラさんにはとても親切にしてもらいました。通常は 14 時から 18 時の間しか資料調査はできないのですが，2 日目からは 12 時から見せてもらえました。もっとも，予想していなかったことですが，貴重な資料ですので，1 回につき 10 枚しか渡してもらえず，たとえばマニュスクリとタイプ原稿との比較検証などができず，不便な思いをいたしました。先にも述べましたように，カミュのオリジナル原稿は銀行の金庫に保管されていて，目にすることができるのはオリジナル原稿のコピーかあるいはマイクロフィルムからとったコピーのはずでしたが，まったく思いがけず，「第一ノート」(1935 年 5 月～1937 年 9 月) の肉筆原稿を目にすることができました。『手帖』は 9 冊のノートからなっていて，生前刊行に同意したカミュはその「第七ノート」(1951 年 3 月～1954 年 7 月) までタイプ化させています。タイプ化の折にカミュが手を加えたことは間違いなく，ロットマンによれば，1937 年 9 月までの「第一ノート」は年代に関しては信用できないとのことでしたが(Herbert R.Lottman, *Albert Camus*, Traduit de l'américain par Marianne Véron, Seuil, 1978, p.99.)，この直筆原稿には驚かされました。紙質の違うおそらくは二種類の大学ノートがばらばらにされ，組み合わされているのです。そればかりではありません。綴じられていない紙やタイプ化された紙が挿入されている箇所もあります。その順序で「第一ノート」のタイプ化がおこなわれ，それが出版されていたわけです。確かにロットマンの言うように，配列にはまったく信のおけぬ代物でした。

『手帖』の冒頭は実にかっこいいものです。「僕の言いたいこと」云々，「作品は告白だ。僕は証言しなくてはならない」。「第一ノート」の最初

のページにこんなふうに作品創造への決意をしたため，そしてカミュは処女作『裏と表』の創作へと向かっていったと考えていましたし，一般的にもそう捉えられていたと思うのですが（ただし，ジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史は，これは『ルイ・ランジャール』のためのメモだとしています。），どうやらそうではないようです。「第一ノート」のタイプ化された第一段階のものも目にしましたが，最初のページ番号は「4」となっていて，そこには今しがたその一部をあげた，刊行されている『手帖』の冒頭部分が，タイプ原稿で3枚分欠落しています。あとで付け加えられたのは間違いないでしょう。なぜそんなことをしたのでしょうか。おそらくは，創作の決意とともに『手帖』を記し始めたのだ，と思わせようとしたのでしょう。この点はどうも好きにはなれませんが，カミュの見栄，気取りといったようなものが透けて見えてきます。

1947 年 6 月の『手帖』にある作品の系列分類からも同様の思いにとらわれました。すでにロットマンは，カミュが現在・過去・未来の作品プランをしたためた 1947 年の『手帖』のオリジナル原稿には«3e – Le Jugement – Le premier homme»なる記述はなく，それはタイプ化された時に付け加えられたものであって，そうすることによって，1947 年からすでにそれらの作品の構想を抱いていたように見せかけたのだと指摘していましたが (Lottman, p.439.)，『手帖』の草稿を目にし，ロットマンの指摘の正しさを確認できました。ここにもカミュの見栄といったものを感ぜずにはいられません。生前名声を得ていた作家が出版に同意した日記や手帖，それに自伝といったものは，やはり眉に唾を塗って読まなくてはいけないようです。

その他にも，資料調査をとおしていくつか事実確認もできました。Inventaire に«*L'Etranger*. Premier état. 1939. Microfiches avec sortie papier (86 ff. : 72 mss+14 dactyl. avec corr. mss)»とありましたから，1939 年には『異邦人』の第一部第一章しか書かれてはいないはずなのに，と不思議に思い調べてみました。これは『異邦人』の第一部第一章のタイプ化された 14 枚の原稿の後，72 枚のマニュスクリが続いているものでした。(Inventaire の内容説明の記述«72 mss+14 dactyl.»は逆にすべきでしょう。) タイプ原稿，マニュスクリとも手が加えられ，修正されています。マニュスクリの最後に付された最初の脱稿の日付«Mai 1940»が消され，«Février 1941»との日付が新たに記されています。やはり，1939 年に書かれていたのは，タ

イプ化された『異邦人』の第一部第一章だけでしたし，第一稿完成は 1940 年 5 月に間違いなかったわけです。ちなみに，1940 年 5 月の『手帖』の記述«*Mai. L'Etranger* est terminé.»には，後で新たに書き加えられた形跡は見当りませんでした。話をもどしまして，先ほど申しあげました，新たに書きとめられた«Février 1941»との日付から，『異邦人』の第二稿完成が 1941 年 2 月だということがわかりました。しかも，この原稿は決定稿とは異なっていますから，決定稿完成までさらに時間がかかったことが推測されます。この傑作が完成したのはやはり 1941 年 11 月くらいでしょう（拙稿，「『異邦人』の形成過程に関する一考察」，『広島大学文学部紀要』第 60 巻，2000 参照）。

カミュが源泉への回帰を表明したものとして有名な「『裏と表』再刊への序文」(1958)については，1949 年と推定される『手帖』にかなり長い記述がでてきていましたし，ロジェ・キーヨはタイプ原稿を目にした 1954 年には完成していたとしていましたが(II, p.1180.)，残された 4 つのタイプ原稿からキーヨの言うように 1954 年にはほぼ完成していたことが確認できました。一番古いタイプ原稿には«Octobre 1953»と日付が打たれ，そしてそれが消されて«1954»とされています。したがいまして，「『裏と表』再刊への序文」の第一稿は，*Le Premier Homme* の着想を得た，「転換点」たる 1953 年にやはり書かれていたのです。仮説が裏付けられた思いでした（拙稿，「*Le Premier Homme* の形成過程」，『広島大学フランス文学研究』N°16, 1997, p.17, p.26 参照）。

カミュの足跡もできるだけ辿ってみました。今は「フィガロ」となっている「パリ=ソワール」，一時期身を寄せていたヴァノー通りのジッドのアパルトマン，その前に泊っていたラ・シェーズ通りにあるミネルヴ・ホテルの跡，セギエ通りのアパルトマン，それに原稿審査委員をしていたガリマール社等々。わけても興味深かったのは，1940 年 3 月 16 日，パリにやってきたカミュが投宿していたラヴィニャン通り 16 番地のポワリエ・ホテルの跡です。パスカル・ピアの口利きでカミュはこのホテルからパリ=ソワール社にかよっていたのですが，「一日 5 時間」しかも「ただの 1 行」の記事も書かず割り付けの仕事をしながら(Olivier Todd, *Albert Camus une vie*, Gallimard, 1996, p.237.)，『異邦人』に集中的に取り組み，第一部第二章以降の部分を書きあげ，5 月 1 日に第一稿をパリで完成させるわけです。もっとも，このホテルで 5～6 週間過ごした後，サン=ジェ

ルマン=デ=プレ教会の向かいにあるマディソン・ホテルに移りますから(Lottman, p.238.)，ポワリエ・ホテルで『異邦人』の第一稿を書きあげたわけではありません。といっても，かなりの部分をポワリエ・ホテルで書いたことは間違いないでしょう。ポワリエ・ホテルはモンマルトルの坂道の途中，小さな広場（エミール・グドー広場）に面したところにあります。仕事を終えた後，一体どんな思いでカミュはこの坂道をのぼったのでしょうか。おそらくはふつふつと沸きあがる着想を一刻も速く紙面に固定さすべく急ぎ足でかけのぼった日もあったことでしょう。今はもうホテルはなく，別のアパルトマンが建っていましたが，その前に立った僕は一驚を禁じ得ませんでした。広場をはさんだ向かいにはあの「洗濯船」があったからです。(ロットマンも「洗濯船」が向かいにあると言及していましたが，僕は失念していました。) ピカソがここで「アヴィニョンの娘たち」を制作したのは 1907 年です。ほんの 10 メートルばかり離れたところで，33 年後カミュが『異邦人』を書きすすめることになるわけです。パリだとこんなこと，珍しくもなんともないかもしれません。だとしても，この偶然は僕には大いなる驚きでした。カミュが「洗濯船」を知らなかったはずはないでしょう。広場のベンチに腰掛け，マロニエを眺めながら，しばらく夢想にひたっていました。

第一次世界大戦で戦死したカミュの父親の墓のあるサン=ブリウーにも行ってきました。カミュ自身，1947 年にルイ・ギユーと共にこの墓を訪れています。カミュの遺稿 *Le Premier Homme* にはその時の体験が強く投影されています。遺稿の第一部第二章で，40 歳になった主人公ジャック・コルムリは父の墓を初めて訪ね，墓標に刻まれた「二つの日付」«1885-1914» から父が今の自分より若くして死んだことに愕然となり，それまではまったく関心がなく未知の存在にすぎなかった父親の探索へと向かうことになります。そのような思いをカミュに抱かせたであろう，その同じ場に僕も立ってみたく思ったのです。(ルイ・ギユーの証言から，カミュ自身，ジャックと同じ気持ちを抱いたと考えられます。Lottman, p.440.)

サン=ブリウーにあるサン=ミシェル墓地の呼び鈴を鳴らしても，誰も出てきません。仕方なく墓地内に入ったのですが，どこにカミュの父の墓があるのかわかりません。初老の男女がいましたので尋ねてみますと，男の方が管理人で親切に案内してくれましたが，おしゃべりな男で，僕としては一人でいたかったのですが，なかなか離れようとしません。そ

れでいろいろ話しているうちに，思いがけぬことを耳にしてしまいました。1976 年に墓が移されたというのです。距離にしてわずか 7〜8 メートルといったところですが，とはいってもこれは決定的で，僕はカミュと同じ場に立って墓を目にしているわけではないのでした。管理人がルイ・ギユーの墓も敷地内にあるというので案内してもらい，そこでやっと彼と別れることができました。一人でカミュの父の墓にもどってみました。高さは 1 メートルにも満たぬ簡素な十字架です。カミュの父同様，サン=ブリウーの病院で死んだ兵士のものでしょう，まったくつくりの同じ 15 の十字架の墓標が並んでいます。カミュの父の墓には，次のような言葉が刻まれています。

SOLDAT
CAMUS LUCIEN
1eme ZOUAVES
MORT POUR LA FRANCE
11 OCTbre 1914

（«1eme»は，おそらく«11eme»の左の«1»が剥がれ落ちたものでしょう。）

生年月日は刻印されてはおらず，ただ亡くなった日付«11 OCTbre 1914»だけが記されていたのです。「二つの日付」ではなく，実際の日付は一つだった，そのことはよくわかりました。また，*Le Premier Homme* では戦死した父親に対し«tué»が使われている箇所が目につきますし，主人公のジャックにはフランスへの帰属意識はないのですが，一体どのような思いでカミュは«MORT POUR LA FRANCE»という文字を読んだのだろう，と考えさせられてしまいました。そのような思いにとらわれはしましたが，わずかとはいえ墓が移されていた以上，なにかしら空しさを覚えるサン=ブリウーへの旅でした。

それから，今になって悔やんでいることが一つあります。1976 年に移されたとのことでしたが，その折，墓を変更しなかったかどうか聞いておかなかったことです。*Le Premier Homme* では墓石(pierre)となっているのが，実際には十字架だったのですが，もしかしたら 1976 年に十字架に変えられたのかもしれません。十字架がさほど古色蒼然たるものではなかった印象がよみがえってきました。写真を見ても，やけに新しいものに思えてきます。もし変更されたのだったら，もしかしたら墓碑銘も変わっているかもしれません。だとしたら，僕はカミュと同じ位置に立っ

て墓を見なかったばかりか，同じ墓を見なかったことになります。一体何をやってるんだ，という思いです。8 月 22 日，管理人に手紙を出してみました。今はその返事待ちです。もっとも，事実がわかっても，どうってことない問題かもしれませんが……

とは申しましても，今までお話しした今回のフランスでの僕のカミュ体験は，いずれ醗酵させなくてはならぬ酵母のようなものだと思っています。

具体的なささやかな成果について，最後に簡単にご報告しておきます。もう随分以前に発表したものではありますが，日本フランス語フランス文学会誌に掲載された«Sur l'honneur chez Camus – nouvelle valeur dans *L'Etat de Siège*»の抜き刷りを何人かのカミュ研究者に渡したのですが，カミュ研究会の«Bulletin»(N°60)で「名誉」が話題になっていたこともあって，«Bulletin»(N°61)の書誌欄で紹介されました。以前の研究成果が今回の在外研究によって評価を受けたという点で一つの収穫といえるでしょう。それよりももっと大きかったのは，マルヌ=ラ=ヴァレ大学のセミナーで，今までに書いていたものに少し手を加え，二度研究発表したのですが，それらの論文が専門誌に掲載される予定となったことです。研究成果をフランス語で発信する必要性を痛感した 10 ヶ月でしたから最低限のノルマが果せた思いです。

とりとめもない話ですが，以上です。ご静聴，ありがとうございました。

付記

資料調査ならびにその成果を発表する許可をいただいたことに対し，カトリーヌ・カミュ女史に深謝する。

また，畏友三野博司氏のご厚意により，ジャクリーヌ・レヴィ=ヴァランシ女史の博士論文(*Genèse de l'œuvre romanesque d'Albert Camus*)に目をとおすことができた。この場を借りて，お礼申し述べたい。